

漢文入門期（中学校二年生）指導の試み

— 辞書を使ってグループで漢文に挑む —

三 藤 直 子

一 はじめに

教壇に立つて一年目、中学校二年の古典の授業を担当し、一期二期と古文の授業を行ってきた。その間、どうしても講義調に陥ってしまい、生徒が主体的に古典を学習できる方法はないかと常々考えてきた。そして三学期、漢文指導の計画を立てる際に、「挑む授業」を試みようと考えついた。中学校二年の段階では漢文に関する知識はほとんどないが、その入門期に、書き下し文や現代語訳ではなく、あえて訓点付きのまとまった漢文を与え、生徒自らの手でそれに挑ませることによって、古典としての漢文に親しむきっかけを作ろうと考えたのである。

二 授業計画

① 期間 一九九八年一月十六日～二月二十七日

② 対象 広島大学附属福山中学校二年生（A組～C組）

③ 教材 桃花源記（全文）

④ 指導目標

・ 古典としての漢文を理解する基礎を養い、古典に親しむ態度を育てる。

・ 古典学習活動を通して、自ら学び自ら考える姿勢を養う。

⑤ 指導過程

- 1 漢文訓読法の説明（二時間）
- 2 グループ活動（三時間）
- 3 グループ発表（四時間）
- 4 「桃花源」まとめ（一時間）

三 指導計画を立てるにあたって

指導計画を立てる上で、以下の諸点を考慮した。

① 古文学習との連続、関係

一・二学期と「枕草子」「徒然草」「平家物語」からの教材文をいくつか読んできた。その際、古文の言い回しやリズムなどに慣れ親しませるために、音読をしっかりとさせ、一部は暗唱もさせた。また、古文を黙読したり、書き写したりする作業もさせてきたので、古文特有の助詞や助動詞の用法や活用もそれ程違和感なく受

け容れられると考え、こうした古文での学習との連続性を意識させながら漢文口調に出会わせ、書き下し文をつくる際にも、古文学習での経験を活用させることとした。

② 漢文訓読の基礎学習

中学校二年の段階では、「訓読のきまり」を知っている生徒はわずかである。今回はまとまった漢文を読むことが目的だが、ある程度のきまりは知っておかなければならない。そこで、教材を読むのに必要最小限のきまりを説明することとした。

③ 教材「桃花源」について

「桃花源」は、その内容にストーリー性があるため、「その先はどうなるのか」といった形で主体的に教材にかかわることになり、学習意欲の持続が期待できる教材である。

また、教科書（教育出版「中学国語2」）には、「桃花源」の話の梗概、訓点付きの漢文二か所が載せられている。この、教科書に紹介されている話をあらかじめ読ませることで、「桃花源」をすべて訓点付きの漢文で読ませる際の手助けとすることができると考えた。

さらに、訓読法では、「桃花源」には再読文字「未」が一度使用されているだけで、あとはレ点、一・二点、上・下点を知っていれば書き下すことができる。その点でも、入門期にまとまった漢文を読ませる場合の教材として、適切であると考えた。

④ 辞書を使ったグループ活動の導入

一斉学習では、学習に遅れがちな生徒は途中で意欲を失ってしまふことが多い。しかし、小集団であれば、集団の一員として参

加しようとするのではないか。そう考え、ひとりひとりが主体的に学習できるように、またせざるをえないように、グループ活動を導入した。また、その主たる学習活動として、わからないことを自分の力で解決していくための手段である辞書使用、さらにそれを通じた現代語訳作成を課した。

⑤ グループ活動の工夫

・ 四人グループを十班（四十一人クラスの場合は五人班を一つ）つくり、それぞれ代表者を決める。

・ 本文を五つに区切り、二つの班が同じ箇所を担当するようにする。

五段に区切ったのは、作業量への配慮とともに、学習活動をグループ内活動で完結させず、各班に担当部分とそれ以前やそれ以後の内容との関連を、グループ発表の時間に考えさせようとしたためである。

また、各段に二班を配当したのは、各班がそれぞれに自分達の読みを相対化する場面をつくり、両班以外の発表を聞く生徒には、両者を比較して問題を発見し読みを深める契機を与えようと考えたためである。

・ 漢和辞典は班に二冊ずつ配布する。その際、種類の違うもの二冊とする。

辞書によって説明の仕方や載っている語句に差がある（後述）。一冊の辞書では解釈が偏ってしまう。また、一冊では辞書に触れる生徒が限られてしまうということもある。ただ、逆に辞書が多くなれば個別作業になり、グループの機能が低下してしまう。そこで、種類の違う二冊を配布することにした。

用いた漢和辞典は大修館書店「新漢和辞典」・旺文社「漢和辞典」・三省堂「新明解漢和辞典」・小学館「新選漢和辞典」・明治書院「新釈漢和辞典」の五種類である。

四 授業の実際

1 漢文訓読法の説明（第一時）

「桃花源」を漢文で読むためには、最低限の文法知識が必要である。しかし生徒には文法知識がまったくない。そこで第一時に漢文訓読法の説明をすることにしたのだが、あくまでも文法は「桃花源」を漢文で読むための手段としてあつかい、知識の注入に陥らないようにつとめた。すなわち、漢文を読むために必要なものとして、生徒が興味を持って主体的に文法を学習するよう、配慮した。

まず、「有備無患」という四文字を板書して、その読みを問うた。三クラスとも読めた生徒はおらず、「ゆうびぶかん」などと読んでいた。そこで、その四文字に送り仮名をつけ、さらに漢字の右側に読む順番を記した。すると、その四文字が「備へあれば患ひ無し」と読めることに生徒は気が付いた。

ここで、中国の文章である漢文を日本語で読むために必要なのは、送り仮名をうつことと読む順番を変えることだと認識させた。そして、送り仮名は漢字の右下にカタカナでふり、読む順番を変えるためには「返り点」というものがあることを説明した。

返り点の説明については、まず、「読書」と板書して、その読

みと意味とを生徒に問う。「どくしょ・本を読むこと」と生徒が答えると、本を読む、つまり書を読むことだと言ひ換え、レ点を紹介する。つづいて一・二点、上・下点を紹介する。上・下点に關しては、「有能為拘盜者（能く拘盜を為す者有り）」という文を板書し、もしも上・下点ではなく一・二点だったらどうなるかという例を示し、上・下点の必要性を確認させた。

次に、訓点つきの漢文を書き下し文にする際の注意事項として、

- ① 送り仮名はひらがなで書くこと
 - ② 助詞・助動詞はひらがなで書くこと
 - ③ 歴史的仮名遣いを用いること
- を挙げた。

そこまで説明した後、返り点に従って漢文を読む練習を行わせた。

2 グループ活動（第二～四時）

第二時から第四時までは、グループで担当範囲の書き下し文と現代語訳をつくらせた。

第二時までに各自教科書を読んでくるようにしておいたので、生徒は「桃花源」の内容を把握している。しかし、既知の内容と初めて目にする漢文が同じ内容であるとは、なかなか思えなかつたようである。「こんな話だったからこはこういうことをいっているのかもしれない」ということを頼りに、漢字一字一字を生徒は調べていった。漢和辞典で調べることによって、身近な語の多義性を知ることになり、漢字学習にもつながる。また、書き下し文をつくることによって、漢文の構造を学習し、今後の漢文学

図1. 指導案（第二時）

本時の指導目標

1. 漢文読解に主体的に取り組む姿勢を養う。
2. グループ活動を通して訓読の基礎の定着を図る。

時間	指導内容	指導上の留意点
3分	導入 本時の学習内容の確認	▽生徒は教科書の「桃花源」を読んできている。
	展開Ⅰ グループ活動の準備	▽グループ編成の前に本文プリントを配布することによって、「できない」と強く思わせる。
15分	展開Ⅱ	▽再読文字「未」については、あらかじめ書き下し文を提示しておく。
	<ul style="list-style-type: none"> ・担当復習の書き下し文をつくらせる ・漢和辞書を用いて口語訳をつくらせる 	▽漢字の読み方の質問に関してはその部首を指摘し、自分たちで調べさせる。 ▽全員が活動に参加しているかどうか、あるいは、どんな所に悩んでいるかを見るために机間巡視する。
45分	まとめ	▽各班、プリントを提出させる。
50分	終結	

習の礎とすることをねらいとした。

グループ活動中、机間巡視をしたが、生徒が思いも寄らないところで悩んでいるの場面に何度も遭遇した。

たとえば、「要（むかへて）」は「迎えて」と同じことなのかというように、違う漢字なのに読みが同じ、ということに生徒はつまづいていた。

また、「聞く所を言へば」など、誰が「聞く」のか、誰が「言

ふ」のか、主語がわからずに悩んでいることもあった。

あるいは、「劉子驥」が人名だとわからずに「刀で切り殺す才能のすぐれた人物」と訳したり、「良田美池桑竹」を一単語だと思い四苦八苦したりする風景を目にした。

これらのつまづきは、グループ内で話し合ったり意見をだしあったりして、一応の結論をだすよう指導した。

プリントは毎時間提出させた。第四時の提出後、誤りに気づき訂正したいという班があったが、発表時に訂正するよう指示した。ある班がまちがえたということは、ほかの生徒も間違えうることで、その間違いと訂正を発表することで、クラス全員が確認できると考えたからである。

なお、漢和辞典は班に種類の違うものを二冊ずつ配布したのだが、第三時、第四時になると、「あの青い辞書がよく載っているから、青い辞書がいい」と自ら希望してきた生徒もいた（ちなみに青い辞書とは旺文社の漢和辞典である）。

用いた五種類の辞書を比較してみると、次のような違いが現れた。

○旺文社：「繽紛」「阡陌」「絶境」「黄髮垂髫」などの熟語の用

例は「桃花源記」から引用してある。

○三省堂：「繽紛」「髣髴」「豁然」「阡陌」「絶境」「黄髮」など

図 2. 指導案 (第五時)

本時の指導目標

1. 質疑応答を通してクラス全体での内容理解を深めさせる。
2. 漢文独特の口調や言いまわしに慣れさせる。

時間	指導内容	指導上の留意点
5分	<p>導入 本時の学習内容の確認</p> <p>展開Ⅰ 1・2班の発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 班員一人ずつに担当範囲を音読させる。 ・ 代表者に口語訳を読ませる。 ・ 質疑応答をさせ、意見を出させる。 	<p>▽本時に発表する班の発表資料は印刷してクラス全員に配布する。</p> <p>▽漢字の読みは授業内で統一する。</p> <p>▽質問や意見が出なかった場合や重要なところに関するものが出なかった場合、指導者が質問・意見を出す。</p>
35分	<p>展開Ⅱ 1班と2班の発表内容を比較・検討させる。</p>	
45分	<p>まとめ 本時の学習内容の確認と次時の学習内容の伝達</p>	
50分	<p>終結</p>	

の熟語の用例は「桃花源記」から引用してある。ただ、熟語の二文字目はアイウエオ順ではなく、画数の少ないものから並べてあるため、探しづらい。

○小学館：「續紛」「黄髮垂髻」などの熟語の用例は「桃花源記」から引用してある。また、熟語の二文字目は画数の少ないものから並べてある。

○明治書院：「續紛」「黄髮垂髻」などの熟語の用例は「桃花源記」から引用してある。また、熟語の二文字目は画数の少ないものから並べてある。

いものから並べてある。

○大修館：「續紛」「豁然」などの熟語の用例は「桃花源記」から引用してある（出典名は不明示）。

右の結果を見てみると、最も用例が多く記載され、なおかつ調べやすいものは旺文社の漢和辞典ということになる。自分たちが探している熟語がそのまま用例としてのついていたとき、生徒は「桃花源」に親しみを覚えるとともに、わからないことを自らの手で調べたという達成感を感じたようである。

漢和辞典のひき方について。生徒は音訓索引を利用することがほとんどであった。そのため、読みの分からない漢字はひくことができない。そこで漢字の読みに関する質問ができたが、それについては、部首索引を利用させることにした。部首を確認することによって、漢字の成り立ちや書き順にもふれることになり、漢文構成の最小単位である漢字を正確に使用し、より身近に感じることができると考えたためである。

3 グループ発表 (第五〜八時)

グループ発表の際、担当班以外の生徒は発表資料を見ながら発表を聞くよう指導した。それによって、自分の班の担当以外の書き下し文にも目を通すことになるが、さらに。班員全員が担当箇所を音読するので、聞いている生徒にとっては八回（もしくは九回）同じ書き下し文を耳にすることになる。そのことで、漢文特有の言い回しや表現に慣れ親しむことにつながると考えた。

また、同一箇所についての二班の発表内容を聞くことになるが、両者を比較することによって、担当班にとっては、自分たちとは違う意見に出会って自分たちの考えをさらに深めることになり、担当班以外の生徒にとっては、二つの意見を見比べてどちらがよりよいか、自分の考えをもつことができる。担当班だけが「ああ、そういうことか」と気づくのではなく、クラス全員が授業に参加できることをめざした。

実際に出された質疑応答・意見の例を挙げてみる。

①書き下し文の訂正（二年C組六班の場合）

- ・ 一番多かった意見は、書き下し文の訂正であった。
- ・ 返り点に従ってきちんと書き下せていないもの
- ・ 助詞・助動詞を漢字のままにしているもの
- ・ 逆に、動詞などをひらがなに直しているもの
- ・ 歴史的仮名づかいにしていけないもの
- ・ などへの訂正が挙がった。

漁人を見て、すなはち大いに敬慕さ、よりに木なりし所を問ふ。つぶさたのに答ふれば、すなはちむかへて家たがえり。酒を認めけにはこりて殺して食をなせり。

右の例では、「之」を「の」と読んだために、「つぶさにのに答ふれば」という書き下し文になってしまった。聞いていた生徒は

これに気づき、「之」は「これ」と読むのではないか、という意見をだした。このことにより、「之」という漢字の使い分けを生徒は確認した。「之」という漢字の読みを知識として注入するのではなく、文の中の関係から、「之」の意味を学習したのである。

②語法について

黄色を帯びた白髪のため髪は老人もみいし、自分から身が染み入っている。

<3班>

年寄りや子供など、みんな楽しんでいました。

<4班>

二年C組三班・四班の発表後、「黄髮垂髻」の意味の違いを指摘する意見が出て、なぜここから四班のような「年寄りや子供」という訳が出てくるのかという質問があがった。二つの班の発表を比較し、その違いを全体の場で吟味することで発見された問題点である。この問題点をクラス全体で考えていくなかで、「黄髮垂髻」という熟語が転じて「老人と子供」という意味になったことを学習したが、このことにより、ある語彙が漢文では違う意味を持つ（喩として用いられる）ことに気づき、漢文に興味をもつきっかけになったようだ。また、この訳の異なりは、用いた辞書で「黄髮垂髻」の説明が載せられていないものはなかったから、四班はこれにより、一方、三班は、「黄」「髮」「垂」という漢字

の意味はすでに知っていたので、知らない「髻」の字だけを調べた結果、起こったことと思われる。これにより辞書の使い方への注意が喚起できたとともに、「黄髪垂髻（黄色い髪垂れる髻）」というように、漢字の順番をみることによって、熟語の構成の法則を見直す機会にもなった。

③ 現代語訳の文体について

中国の翌月の時代の太元という年号のこうぢや。武陵の人が漁をして、細長い谷川を縁って行くうちに、方向がわからなくなつて迷子になつてしまつた。

二年A組一班の発表後、「どうしてこのような口調で訳しているのか」という質問があつた。それに対して一班は「昔話のように思えたから」と答えた。これは、中国の古典として漢文に触れ、また、「桃花源」の話全体を自分なりに消化しようとする、主体的な学習態度の現れであろう。そしてそれは、辞書を用いて現代語訳をつくるという作業を進めながら、「桃花源」の話に親しんだ結果であるといえるのではないだろうか。

④ 話の流れについて

「桃花源」の本文を区切ってそれぞれの班の担当範囲とするため、生徒は担当範囲だけに目がいつてしまいがちである。しかし、担当範囲を現代語訳することが目的ではなく、まとまつた漢

文として「桃花源」を読むことが目的であるので、話の流れを確認させる問いを随時教師側から投げかけるようつとめた。

例えば「初めは極めて狭く」で始まる三・四班については、何が「極めて狭い」のかを問い、その前の班の担当範囲を思い出させてそれが漁人が入った「小口」のことであることを確認させた。そして、これから何かがありそうな場面であることを注意をうながした。そうすることによって、個別のグループ活動をつなぎ、「桃花源」全体の学習へと展開させ、教材話の全体をより深く理解させる糸口にしようと考えたのである。

「外人」とは何か

村人の中の一人が漁師に「このことは外の人には話さないで下さい」と言った。
この甲の人が言った、外の人には話さないでください。
 <7班>

この甲の人が言った、外の人には話さないでください。
この甲の人が言った、外の人には話さないでください。
 <8班>

「桃花源」には「外人」という表現が三回用いられている。十班までの発表が終わると、全班の発表資料を見直させ、「外人」がどのような意味で用いられているかを各班で考えさせた。例えば、二年B組七・八班では「外の人」と訳している。「外の人」とは誰から見ることなのか、そこにどのような意味がこめられているのか、「外国人」ということはとの関連はどうかなどを問

いかけながら、それが村人にとって内外を区別するために用いられた表現であることを確認し、漁人が行った村が何であったのかを考えさせる手掛かりにした。

4 「桃花源」まとめ（第九時）

グループ発表を終えて、質疑応答や出された意見を参考にして最終的な現代語訳をつくらせた。そしてそれを偶数班（二、四、六、八、十班）、奇

数班（一、三、五、七、九班）でつなげて「桃花源」の全訳を作

●二年C組偶数班

中国を「晋」という王朝が支配していた頃、太元という時代の話です。

武陵という村に一人の漁師が住んでいました。ある日漁師は近くの谷川に漁に出掛けました。ところが魚がみつかりません。漁師はこれではいけないと思い、魚を求めてどんどん川の上流へと船を進めていきましたが、そのうちに迷ってしまいました。

あわてた漁師はもと来た道をひきかえそうとしましたが、目の前には見知らぬ光景が広がっているばかりです。すると、思いがけず桃の林が目にとびこんできました。

林は長く長く川の兩岸に続いていて鮮やかに咲き誇っているその花からは、とても良い香もしていて辺りはこの香に包まれてい

成した。

全訳をさせたのは、これを作ることによって「桃花源」の内容を再確認し、また、初めて「桃花源」を漢文で見たときにはできないと思っていたことが、グループ学習を通してできたんだという達成感と自信を感じさせるためである。

最後に、グループ学習についての感想と「桃花源」についての感想を班ごとに書かせた。左に二年C組偶数班の全訳と、教科書の「桃花源」の本文を挙げておく。

●教科書

中国の晋の時代のことです。

武陵の漁師がある日、谷川を逆上っていくうち、迷ってしまいました。

漁師は困ってあちこちへと船を進めていくうちに、思いがけず桃の林にでくわしました。

林は川の兩岸に長く続き、かぐわしい香りの花が、鮮やかに咲き誇っています。見たこともない美しさに漁師は驚き、さらに林

ました。はらはらと散り水面に浮き流れていく花びらがとてもきれいで、漁師はあまりにも美しいこの光景に目を奪われました。しかし、なぜこんな所にこのような美しい林があるのかと漁師は不思議に思い、さらに奥へと船を進めていきました。そして遂に川をのぼりきって水源に達してしまおうとそこで桃の林も途切れ、漁師の眼前には大きな山が立ちはだかりました。見るとその山には、ほんやりとかすかに光る洞窟が・・・。「これは一体何だろう。」不安を持ちながらも、好奇心に誘われて、漁師は船を川岸につなぐと船から降り、

おそろおそろ洞窟の中へと入っていきました。(二班)

最初はとても狭くわずかに人が通れるくらいでした。さらに数十歩行くと広大な土地が目の前に広がりました。土地は平らで広くそこにはきたない建物はありませんでした。

肥えた田んぼ、美しい池、桑や竹などがありました。あぜ道も整備されていて、村はのどかで平和そのものでした。畑をたがやしている人などそこで暮らす人々の服装はみんな見たことのないめずらしいものでした。年寄りから子供までみんな幸せそうでした。(四班)

漁師を見て、その後大変驚いて、漁師にどこから来たのか質問した。問われたことをくわしく答えれば、その後漁師を家に招いた。そして酒と焼鳥をふるまってくれた。村中の人が外の世界から来た漁師の話聞き、皆根ほり葉ほり聞きまわした。そして聞

の奥を探ってみることにしました。林は水源で終わり、山に行き当たりました。山には小さな穴があり、ほんやりとした光が見えるようでした。そこで漁師は、船を捨てて、その洞穴の中に入っていました。

穴は初めはひどく狭く、ようやく一人が抜けられるくらいでしたが、我慢してさらに数十歩行きますと、突然、前方がからりとひらけました。

見ると眼前には、平坦でよく耕された土地、美しい家並み、青々とした桑や竹、区画された道路などが広がっています。そのうえ、そこで働く人々の服装は、まるで外国人のようなので、漁師はとても驚きました。

漁師に気づいた村人は、どこから来たのかと尋ねました。あるがままに説明したところ、ぜひにと漁師を家につれていき、お酒や鶏の料理でもてなしてくれました。

そのうち、村の人々が集まってきて、口々に質問します。聞け

きもしないのに、「我々は秦の時代の戦乱を恐れて村中の人でこの世界に逃げてきた。」と言った。それ以来この世界から出ていなく、ついに外の世界との交流が断たれてしまった。「外の世界はどうなっていますか。」と質問をした。つまり漢の時代があったことを知らないのです、当然魏や晋を知るよしもなかった。(六班)

漁師が質問に対していちいち一生懸命くわしく話すと、村人たちは皆びっくりして、「ほうほう、なるほどなあ」と感心し、深いため息をつきました。村人たちはその漁師を気に入り、皆自分の家に招き、酒やごちそうでもてなしました。それから数日後。漁師は別れを告げ、帰ることにしました。別れ際に村人は「このことは外の人に言わないでください」と言いました。でもすでに漁師は船を出しており、もと来た道をつけながら帰っていきました。(八班)

郡の役所の所在地に戻り、地方長官のもとに行き説明した。地方長官からすぐに使いの者は行くよう言われたので従い、以前に記録した場所を捜し求めるが迷ってしまつた上に来た道もみつめることができなかつた。

南陽の劉子驥は俗世間に関心を持たない武士だつた。

このことを聞き喜んで行こうと計画したが、果たそうとする前にもまもなく死んだ。その後そこへ行く港を訪れる者はいない。(十班)

ば、この村人たちの祖先は、秦の時代の戦乱を避けてこの隠れ里に移り住み、以来ずっと外の世界と隔たつたまま、今日にいたつているといひます。そこで漁師が秦以降の六百年間に、漢、魏、晋、と世の中が交つたことを語ると村人は一様に驚き、ため息をつきました。

漁師はこうして数日間、村人一軒一軒から招待を受けたあと、帰ることにしました。

村人は別れの時に、「このことは、外の世界の人には話さないでください。」と漁師に頼みました。

漁師は洞穴を抜け、船に乗り、もと来たとお戻つていきました。その時とところどころに目印を付けました。

郡に戻ると早速太守のもとに出かけ、事の次第を話しました。太守はすぐに漁師を案内人とする一団を派遣しました。しかし、漁師が付けた目印をたどつても、どうしても迷つてしまい、ついにあの洞穴を発見することはできませんでした。

南陽の劉子驥という人は、教養も才能もありませんが、出世しようという欲はなく、高潔な人でしたが、この話を聞き、自分もそこへ行こうとしました。けれども、その思いが果たせぬ

二班は本文をもとに、自分たちの解釈を交えながら、より物語的な訳を試みている。本文には書かれていない迷ってしまった理由や漁師の気持ちなどをこまかく表現し、話の流れをスムーズにしようとしたのであろう。

四班も本文の記述から村の風景を「のどかで平和そのもの」と解釈し、桃源郷のイメージを膨らませている。

六・八班は会話文に「」を施し、登場人物の会話を生き生きと表現しようとしている。

十班は「AをしてB(せ)しむ」という使役表現になれていないため、「太守即ち人をして其の往くに随ひて、向に誌せし所を尋ねしむるに」の解釈に悩まされたようである。「使いの者は行くよう言われた」と受動態にして主語を変え、この一文を読み解いたが、何に「随」うのか曖昧になってしまった。

五 反省点・今後の課題

ひとりひとりが主体的に学習することを目標にグループ活動を行ったのだが、実際、グループ発表時に質問をしたり意見を述べたりする生徒は限られていた。生徒全員が積極的に授業に参加するためには、前以て発表資料を配布しておく、それぞれの班内で

うちに、病に倒れ死んでしまいました。それ以後、その場所への渡し場を尋ねる者はいなくなりました。

考えさせる時間を多く与えるとか、毎時間発表について全員に書かせるなどという配慮が必要であるのかもしれない。

また、グループ発表を終えて「桃花源」の全訳を作る際に、前の班の訳とのつながりを考えさせる場を設けるべきであったと思う。そういう場があれば、グループ発表で得たことをもつと活かせたのではないか。

さらに、最後に書かせた感想の中には、「話がわかった時はうれしかった」「一つの漢字にはたくさんの意味が含まれていて、文に適する意味をみつけたときはうれしかった」などと、自分の力で漢文を読解したことに對する喜びを書いている班もあったが、逆に「書き下し文の感じから内容を考えて、やっぱり思ったのとちがった」などという、読解することの難しさを感じたものもあった。グループ活動では理解できなかつたことを、教師側がどのように補足していくべきかということを考えていく必要がある。

今回、一つの漢文作品を、グループで漢和辞典をもちいながら自分たちで読み解く、という活動を行ったのだが、そこでつけた力を今後の学習態度や学習内容にどう役立てるかということも、今後の課題である。

六 おわりに

「桃花源」の本文を配布したとき、教室は騒然となり、「こんなできない」と、生徒は口々に言った。が、漢和辞典で漢字一字一字調べていき、漢字と漢字のつながりを考えて現代語訳が完成した。中には漢和辞典だけでは足りなくて国語辞典や古語辞典を用いる生徒もいた。わからないことを自分たちでわかろうとする、その態度を養うことのできる授業を、これからも心掛けていきたいと思う。

(広島大学附属福山中・高等学校、非常勤講師)